

### III. 研究員の考察

#### 5. 細川玲子研究員による考察

“この 10 年間” に目を向ける事から見えるもの

今から 10 年前平成 6 年 12 月、少子化の進行に対応するためエンゼルプラン及び緊急保育対策等 5 か年事業が策定される等、多様化する保育ニーズに対応する新しい保育施策が実施されました。当時国として子育てに関わる施策を打ち出した事は、大きな変動でした。子育てという人が行ってきた営みに、ようやく光が当てられしっかりと表舞台に立つことで子育てが社会で認知されるスタートでもありました。今、あれから 10 年が経ちました。現在の子育ての現状は決してよい方向に向いたとは言えません。それどころか子どもを取り巻く様々な痛ましい事件がつぎつぎと起こり、子育て環境は加速度的に変化をとげています。“国として取り組んできた少子化に対応する保育施策” に一つの姿として答えがでてきたのではないのでしょうか。その後様々なサービスや子育て支援策が打ち出されていますが、少しも明るい見通しや希望がみえるものとなっていません。

ますます「子育てを楽しみと思える親」が減少している様に思えます。負担を軽減していく為のハード面、物質的な部分の充実は以前に比べれば進んできたものの、社会全体が子育てに向ける意識を感じ取ると明かに求めているものの方向がずれています。

この度の調査研究でのひとつに 10 年間での保護者の変化を調べたことが今後の方向性を示し明確にしていく為にも重要であると考えられます。さらにこの度の研究内容を見ていっても、「親」が親になるための耕しや、親としての土台となる様々な体験の中から生まれた心の成長をとげる為の地盤づくりが整っていなかったのではないのでしょうか。

調査研究の内容で留意すべきことに 一人親家庭が増えた 64.8% 親としての意識が薄れた 52.9% 権利意識が強くなった 44.5% となっています。この状況を見て親達のなかに、自分自身の最も最優先課題として子育てに取り組む意識が生まれ、育つてくることに疑問を感じます。それどころか自分を中心に考える意識が強く感じられます。

まさに親が他者への思いやりや愛情や、関心に向ける所まで育っていく事の難しさを感じるのです。本当の意味での社会性が育った大人は、他者を思いやることができ、人の為になれるはずです。子どもを育てるところまで心は成長していないのかもしれませんが。日本は、今物質的に豊かになりました。けれど子どもたちが心のそこから安心して夢をもち、希望をもつ様な社会ではありません。そのことは、超少子化という結果として示されています。子どもが少ないならばなおの事、ここでもう一度「大切な子どもを育てることとはどういう事であるのか」人の心が育っていく事とは・・・そしてそれには、どういう事が必要なのか、最初から皆で意見を交わしていく、最初から議論し合っていくことが必要です。子どもを育てることに喜びを持つことには、何が必要か・・・。

人が人として尊ばれ、その一生を自ら幸せと感じ生き抜く事が人の権利として守られ

る社会となったはずです。そんな中で最も弱者として子どもは存在します。その幸せをどこまでも守る保育園は、子どもの立場を最優先にし、お互いの考えを様々な工夫を持って話し合っていくことです。コミュニケーションが苦手な親にも様々な保育園からのアプローチやスタイルを示すことで、子育てを豊かで楽しい意識へと向け、生活そのものも、子どもが居るからこそ楽しいとして彩られ豊かになります。いかに社会全体で多様な価値観を認め合い自分の考えを持つことを認められ個人の考えがよしとされる中でも、親や保育者が自分をみつめることを含め“人がいかに生きるか”を「子育てそのもの」という根本的なところから、親も保育園も地域社会を含んだ行政も大人が子どもの立場を最優先にし合っていくことです。親だけでない社会全体が、言い換えれば、大人達全員が身勝手な考えをそれぞれに納めあい反省し、子どもにとって自分達がどう向き合う事が大切なのか、最優先にたつべき子どもを本当の意味で大切にしているか。

意識を常に抜け落とすことなしに確認し行う事ではないでしょうか。その事は子育てへの閉塞的で暗い空気やそこから生まれる社会が作る意識を変え、社会全体が、日本人一人一人が、自分にも子どもを育てていく事への責任がある事を知っていく事です。その積み重ねが、子育ての大切さを意識し始め、子どもへと気持ちをむけていき、子育てを懸命にする親達への理解を深め、まなざしを変え、『子どもを育てる事が楽しみであり、喜びである』という空気へと変えられる。「頑張ってるね子育て」という応援の常識となります。こんな意識が親を案外大きく支えるはずです。

『子育てはだれにでも簡単にできる』という幻想

やはりと思いつつ、子育て環境の変化に「離婚による一人親」の増加があります。また、个性的でかわった子どもや多動、自閉、いわゆる「多くの支援が必要な子ども」「気になる子ども」の増加もあります。育児不安を抱き、子育てが分からない親は 20 年以上も前から存在しています。しかし父親と母親のそれぞれが忙しく、気持ちの面でゆとりを持つ事がますます難しい日常の中です。さらに子育てにリスクの多い親が増加しています。超少子化も進みさらに子育てが困難になっていき、解決への糸口がはっきりと示され整わない中で、閉塞感や不安感の増大、大きな負担感が膨らみ、やり場の無いストレスが暴発し、最も心配される虐待が増加していくのも又、当然の結果ではないでしょうか。

社会全体が『子育てはだれにでも簡単にできる』という幻想を捨て、その方法や手だてをもっと個々に合わせて具体的に示し伝えていく事はできないのでしょうか。地域社会の中で育児を自然な形で見習える環境はなくなりました。親になろうとしても赤ちゃんの存在は身近に無く、経験や見習いの場は無いのです。すでに保育園現場では、育児相談という形で対応してきました。指針に示される様に子どもの二十四時間を、つまり家庭やその背景を十分理解し、親を受容し、親一人一人の支援や親としての育ちを把握した上で保育園の立場にたつて保育士が生活の全体を見守っています。支援者である保育園は、依存という部分であくまでも一人一人が自立に向く為の援助をします。

ほとんどの親が突然親になり、日々の子育ての一つ一つを自分で考えてやっていく事になります。思った以上に予定していなかった事ができます。わからない事ができます。夫々の個性や就労、背景など様々な要素を一括りにできない中でも、親が親として育ち親になっていく為の様々な要素を取り入れた親教育方法を具体的に整えていく事が必要です。つまり親自らが育つ内容の“親育てプログラム”（親育ちプログラム）の必要を感じます。保育園の保育のなかで育つ集団の良さを生かした今までのものとは、別の物です。

さらにここで改めて理解しておかなければならない事は、現在保育園に子どもを連れてくる世代は、女性の就労と核家族化が進み、すでにある程度の豊かさの中で、自分自身の親も就労をしながらの子育てをしていた為に、自らも親からの関わりが薄かった世代の親である事が考えられます。何よりも物理的に育児時間が少ない親に育てられています。さらに母親は、キャリアアップを含めた自分自身の自己達成に気持ちの中の大きな部分を占めていく事があります。女性の就労への整備がされない中で、仕事を充実させる為に必要な時間を取る事を優先させずにはいられない。意識の大部分を仕事へと向ける事で子育てへの気持ちを向ける部分を多くもてないのです。子どもにとぎれる事なく誰かが愛情の目をむける事で心を配る、しっかりとだれかが関わり向き合う中で育てる、という基本的な事が大きくゆらいでいる世代です。すでに核家族化が進み、大家族やお互いに関係を持っていた地域が子育てを補ってくれる訳でもありません。

子どもは多くの大人との関わりの中で（人と人の関係性の中で）日々総合的な認知能力を刺激されつつ繰り返し育っていく事で、人が人として自然な形で育つ成長の姿があるはずですが、適切な人による刺激が少ない中で、大切な育つべき部分が育つべき時に少しずつ抜け落ちていったのではないのでしょうか、それをどこかで補ってくれた大人たちの存在はすでにありません。少しずつ落としている子育てに無くてはならない大切なものとは何か。例えば季節の行事、親戚の付き合い、食事の前の挨拶、などなど面倒で無駄に思えたしつけや、生活経験・生活場面、子どもによく育てと祈りや願いを込めた、歌や行事があり、人とのかかわりの中で、わが事のように褒め認め、厳しくしかってくれたそんな大人がいた地域や社会は、もう懐かしい夢の中の出来事なのではないでしょうか。

様々な人育ての大切な知恵や工夫があったはずですが、親が親になっていく中でもう一度、皆で確かめ話し合っていく事が必要です。さらに一度抜け落ちたものの修理には、大きなエネルギーがいります。新しい事を何とか励ましながらかしこくやる工夫をこらし「親が親として育つ事も含めた子どもが育つ為に必要な子どもへの関わり方」を保育園ならではの様々な環境、そして保育者の創意工夫で真剣に伝えていく事が必要です。そのためにも、社会全体で親の子育てへの気持ちを分担していく空気も生まれてくる事が願われます。

毎日の保育という生活の中で具体的な子育ての方法を伝えながら、一人一人に添って子どもと一緒に育ててきた保育園の経験と愛情が、今度は、社会的親のひとつとして最

も大きな支援者の役割を日々果たすはずです。保育園の持っている子育ての知恵や保育の工夫には、たくさんの素晴らしい蓄積があります。本来ある保育内容の質の向上をはかりながらの見直しにもなります。

子どもは、親と地域の支援者（社会という親）が共に育てる

今回の調査で取り上げた「保育参観」や「保育参加」は、その中でも従来からある形態を自然な形で使う事のできる、保育園らしい楽しいプログラムです。育児のプロと一緒に子育ての場面に参加していき、保育士や他の親の真似をしながら自分らしい方法で自分の子どもとの楽しい共感のひとときを持つのです。私の現場でも、各年齢で保育に参加する形態をとった保育参観が年何回かあります。親達は熱心に参加しています。保育士によるたのしい工夫を凝らした内容と各年齢の発達課題を取り入れたものです。同時に親同士が忙しい中でも何回か顔を合わせるうちに、顔みしりになっていき友達になっていきます。今年0歳児クラスでは、親の離乳食に関する相談をきっかけに要望に応え、一人一人の多忙なスケジュールを調整し食事の時間帯に集まってもらいました。

保育園からの日々のお便りや離乳食のレシピの紹介は従来どおりしていても、実際に保育士の食べさせかた、栄養士が作った離乳食の各月齢に合わせた内容を目で見ると、ステップが進んでいる子どもの様子を観察する事などなど一人一人の違う個性を感じ取ったはずです。“ママ友”作りをしていきたいという要望もあって引き続きおしゃべり会を計画し行いました。メールアドレスの交換を行ったり楽しい一時を過ごしていました。その後何人かが子どもが体調を崩し入院、中には手術となった赤ちゃんもいました。そんな時も友達の支えがあり、一緒にその時を共有していく仲間がいました。仕事と育児を諦めず投げやりにならず、なんとか乗り切る為の支えの一つとなっていた様です。子どもの病気で欠勤が続く仕事は大丈夫かしら、と傍らで見ていてははらしました。仕事と子育てを両立していく為の努力とそこにかかるエネルギーや大変さには、頭が下がる思いです。子育てがあればほど大変であっても、今までに無い新しい喜びの世界をあげて、生きる事の楽しさを実感していきます。親が栄養士とともに子どもの姿を話している時の輝きが生きている喜びとして感じ取れます。

逆にそんな中で毎日を乗り切れず、日々その皺寄せが子どもという最も弱い存在の育ちに関わってくるケースも少なくありません。仕事や病気、障害、様々なリスクが突然家族にふりかかれば、たちまち家族としての体力、能力は、弱ってしまいます。そんな時もさらなる親理解を深め、その子どもにとって最も大切な存在である親に、そこまで育児を知らないのかと根気良く育児の手だてをより具体的につたえていく事で、育児への自信をはぐくみます。親の育児を支えていく、どこまでも親の味方になっていくことも生活を共にしている保育園の保育士の役割です。信頼というどこまでも信じあい、いざという時に頼れる事がかなう関係です。その中から一緒に子どもを育てる事を考えていきます。子どもを縁とし保育園での様々な出会いの中で支え合って育ち合う事ができます。さらに、自分自身が親として自分の子どもであっても自分では無い他人として、

うまく関わる事ができない親も現実にはいます。そしてその親がもはや特別な親ではありません。就労の長さに関係なく子育て能力も含めた生活全般をスムーズに行っていく能力の弱さを感じる親も増加しています。ますますその時々適切な援助をしていく事を見極めていくことが求められていきます。

親が親に育つ為の支援を地域全体で行う

「保護者が養育できない時間帯を保護者に代わって家族養育の補完を行う役割を担っている。そのため保育所は、保育に欠ける乳幼児が生涯に渡る人間形成の基礎を養う極めて重要な時期に一日の大半を過ごすところになっている。」これは、保育所保育指針の中に示されたものです。親の就労を支援するニーズに応え“保育に欠ける状態から発するニーズへの対応”が求められています。まさに子育ては親や家庭だけでなく、“社会的親”である保育園や地域の子どもの福祉を守る様々な地域資源の支援によって進められる方向にきました。行政が関わる地域資源となる関係機関（福祉、保健担当課、福祉事務所、児童委員、保育所、児童館、学校、警察、医療機関、司法、民間団体、児童相談所等）との連携を様々な機会を作り進め始めています。保育園でも子育ての補完を行うため、家庭での育児時間を含めた二十四時間を見据えて個々に対応し手厚い保育をおこなう様に求められています。しかしあくまでも家庭のための保育園であるにも関わらず、保育園が親に代わって子育てを担っていきすぎるとは親子が共に育つ事にならないのではないのでしょうか。つまり今までの様な親のニーズにできるだけ応えていく支え方では、子どもが育つための支援になっていかないのではないか…という事です。親子の前に様々な困難の壁がある事は、乗り越える度に親子を育て強くしていく力を作るものになる場合もあったはずで。“大変”が乗り越えた時に大きな自信や、達成感、ひいては喜びにつながります。

子育てに負担感を持っていると答える親が、以前行った厚生労働省の調査によれば約8割もいるという現実もあります。その負担や不安へ向かうものを喜びや希望に変えていくことは出来ないのかと考えた時にも、保育園が持っている環境、蓄積してきた様々な力が生かされていく事と思います。